

列王記第二18章 「献身にともなう恐れ」

1A 恐れという武器

2A 主への献身 17章

3A 敵の中傷 17-25

1B 肉の弱さ 19-21

2B 排他的という非難 22

3B 物理的な力 23-24

4B 主の御名の濫用 25

4A 敵の偽り 26-37

1B 主への信頼 26-30

2B 物質の約束 31-32

3B 異教の神々との同一化 33-37

5A 主の宮に入る王 19章

1B 主の言葉

2B 心を注ぎだす祈り

本文

こんばんは。私たちは合同修養会において、「恐れとの戦い」というテーマで学びの時を持ちたいと思います。修養会では、西東京とロゴス東京の二つの教会にとって、何が益になるのかを考えて、祈って取り組んでいこうとしています。初め、「教会における霊の戦い」というテーマだったのですが、「霊の戦いでも、特に恐れとの戦い」が、日本社会に生きていると、大きな課題になるなあ～と感じているので、そこに絞って見ることにしました。

1A 恐れという武器

ここに、「新しい信者の学び」という、基礎教理を学ぶ冊子があります。元々は、カルバリーチャペル・コスタメサで新しい信者の学びクラスがあって、そこで使われているものを日本語に訳しました。その「第十週 キリストを第一とする」というテーマで、イエス様を主として生きることについて学ぶところがあります。そこに、こう書いてあります。

「従うには戦いがあります： 人々がなぜイエス・キリストを自分の人生の主として認めたくないかには、2つの理由があります。

- 1) 神が、自分のしたくないことをするように言われるのではないかと恐れているからです。
- 2) 神が自分の最も善いことをし、深く心にかけてくださっているという確信がないからです。」

私たちは、自分の生活はある程度、安定しているし、大きな葛藤を抱かずに暮らしていたかもしれませんが、けれども、一旦、イエスを主として受け入れ、この方に従っていくとすると、そこに数多くの課題や難題と思われることが出て来ます。その多くが、「恐れている」というところに根を持っています。アメリカで私は聖書教育を受けましたが、アメリカでは「自分の個人生活を変えないといけない恐れ」が出てきます。自分個人が犯している罪、例えばドラッグや性的な罪、アルコールであるとか、そういったものを変えないといけないという恐れです。けれども、日本ではそういった個人の罪もありますが、「先祖の墓はどうなるのですか？」ということの恐れもありますね。自分の夫は仏教徒で、仏式の儀式があるけれども、私がクリスチャンになったら、それをやめないといけないのだろうか？という恐れです。ですから、「人を恐れる」という縛りですね。

箴言には「29:25 人を恐れると罨にかかる。しかし、【主】に信頼する者は高い所にかくまわれる。」とあります。どのような罨なのか？と言いますと、新しい信者の学びに書かれているように、「神が自分の最も善いことをし、深く心にかけてくださっている」という信頼を置けないという罨なのです。恐れているので、神のことには関わりたくないということです。そのために、信仰を持たず、または信仰から退いて、再び自分の生活という殻の中に戻ってしまう罨です。

ヘブル人への手紙は、ユダヤ人でキリストを信じる人たちが、同胞のユダヤ人から迫害を受けるので、恐れ退いて、従来のユダヤ教の中に戻ろうという誘惑を受けていた中で、著者が手紙を書いたものです。ですから、とても似ている問題に取り組んでいるのですが、こう言っています。「10:37-39 「もうしばらくすれば、来たるべき方が来られる。遅れることはない。わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。」しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」恐れ退いてしまうと、滅ぶと警告しています。その恐れに打ち勝って、主に信頼すれば、命を保つ、つまり主にある永遠の命にあずかる、ということです。主が良い方であられる、善であるということに信頼ために、何ら関わりたくないとするのが、タラントの喩えの中では一タラント受け取った者でした。「マタ 25:24-25 一タラント預かっていた者も進み出て言った。『ご主人様。あなた様は蒔かなかったところから刈り取り、散らさなかつたところからかき集める、厳しい方だと分かっていました。それで私は怖くなり、出て行って、あなた様の一タラントを地の中に隠しておきました。ご覧ください、これがあなた様の物です。』」主が怖いからだからということで、自分の生活に神を関わらせることを一切、拒んでいたのです。

私たちは、神が愛だということを言葉で聞き、知っています。けれども、どんなことがあっても、自分がどんなであってもそれでも愛しておられる愛ということについては、もしかしたら受け取っていないことがあります。「Iヨハ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」愛と言っても、全き愛であります。それは、私たちがキリストの愛にあつて、全きものとされているからです。キリストが義であられるように、私たちもキリストにあつて義とみなされています。キリストに欠けがないのです

から、キリストにある私たちも欠けがない、不法がないとみなされているのです。それは私たちが実際にそうになっているということではなく、神が愛の中で、私たちをそのようにみなしておられる、ということです。キリストが私たちのための罪の供え物となってくださったからです。

ですから、愛といっても全き愛なのです。そして全き愛は、恐れを締め出すのです。神に罰せられるのではないか？という恐れを締め出すのです。ところが、愛が全き愛であることを受け入れているかどうか、吟味する必要があります。そうっていないので、何か神を怖がっている、そのままの姿で近づくことができず、そして恐れがあり、それで神の恵みを知ることができていないということが起こります。

2A 主への献身 17章

そこで私たちは、勇気を出して一歩前に踏み出す必要があります。イエスを主として生きる一歩です。そこには信頼が必要です。主が確かに自分を愛しておられる、全き愛で愛しておられる。だからこの方に信頼して、自分を献げることを決意するのです。そのような人の一人として、今晩はヒゼキヤ王を見ていきたいと思います。

ヒゼキヤが王となった時、彼がいち早く行ったのは、宗教改革です。彼の父アハズは、ユダにとんでもない偶像礼拝を持ち込みました。まずそれを一掃しました。一掃しただけでなく、その前の良い王様と言われていた人々でさえできなかったことを成し遂げました。「Ⅱ列王 18:4 高き所を取り除き、石の柱を打ち砕き、アシェラ像を切り倒し、モーセが作った青銅の蛇を砕いた。」とあります。高き所とは、まことの神にしる、偶像にしる、神々に対して捧げ物をする所です。まだエルサレムが神の宮として定まっていなかった時は、偶像礼拝でなくとも、イスラエルの民は他の周囲のカナン人と同じようにして、高き所で主に対していけにえを捧げていました。けれども、主がここにわたしの御名を置くときから、エルサレムの神殿以外のところでいけにえを捧げてはならないと主は律法で戒めていました。

そこには神の配慮と知恵がありました。どんなにまことの神を礼拝するとしても、どこにおいても礼拝を捧げているならば、周囲のカナン人の宗教が定着している中で、影響を受けてしまう、偶像礼拝をしてしまうということを知っておられたのです。事実、主なる神、ヤハウエの神をあがめているその礼拝の場に、カナン人の神である石柱も立てていたりしていたのです。アラドというイスラエルの古代の町に、エルサレムの神殿と変らない、礼拝の場が発掘されています。その至聖所には、ヤハウエを示す神の柱と、他のカナン人の神を示す柱のどちらもが立っているのです。

歴代のユダの王たちは、それらがよくないことだと分かっている、民の宗教生活の中に定着していたから、そのままにしていたのです。しかし、父アハズがとんでもない形で偶像礼拝を導入させました。興味深いのは、とことんまで偶像礼拝を行ったので、悪い意味での凄さを人々が知って、

嫌な目にあっただのかもしれませんが。ヒゼキヤが宗教改革を断行できたのは、そうした人々の霊的な飢え渇きという背景があったのかもしれません。

いずれにしても、ヒゼキヤは勇気をもって宗教改革を断行しました。では、ここでユダの国の状況が良くなったか？と言いますとそうではありません。ユダの国はたしかに強くなりましたが、北からのアッシリア帝国はますます拡大していています。アッシリア帝国が南進してきており、彼が王となってから四年後に、アッシリアの王シャルマネセルがサマリアの攻め上り、その三年後に首都サマリアは陥落しました。私たちが、イエスを主として受け入れ、この方に従えば、その後の生活の質は向上すると思えば、必ずしもそうではありませんね。むしろ、ヒゼキヤと同じように、これから来る試練のために、主が敢えて私たちを前もって救い、その試練に耐えるように備えてくださったののかもしれません。

はっきりしているのは、イエスを主として告白し、この方を主として生きる、主に自分自身を献げる生活を始めれば、そこから霊の戦いが始まるということです。「使徒 26:18 それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。」サタンの国から、御子の支配の中に移していただきました。教会というのは、ゆえに、霊の戦いの最前線にいて、自分自身を主に献げる時にこそ、その戦いは熾烈になるのだということです。

3A 敵の中傷 17-25

そこで列王記第二 18 章 17 節から読んでいきたいと思います。17 アッシリアの王は、タルタン、ラブ・サリス、およびラブ・シャケを、大軍とともにラキシユからエルサレムのヒゼキヤ王のところへ送った。彼らはエルサレムに上って来た。彼らは上って来ると、布さらしの野への大路にある、上の池の水道のそばに立った。18 彼らが王に呼びかけたので、ヒルキヤの子である宮廷長官エルヤキム、書記シェブナ、およびアサフの子である史官ヨアフは、彼らのところに出て行った。

紀元前 701 年のことです。セナケリブは、地中海沿いに南下して、それから北東にあるユダの町々を倒していき、南西からエルサレムに近づきました。そして、南南東 50 キロぐらいのところにある、要塞の町ラキシユに王は来ます。そこで何を行なったかは、ニネベで見つかった板の絵の中に出てきます。兵士たちが串刺しにされている姿、皮を剥がされている姿です。そして、「上の池の水道のそばに立った」とありますが、つまりエルサレムの住民の水源になっているところをアッシリアが掌握したということです。

1B 肉の弱さ 19-21

19 ラブ・シャケは彼らに言った。「ヒゼキヤに伝えよ。大王、アッシリアの王がこう言っておられる。『いったい、おまえは何に拠り頼んでいるのか。20 口先だけのことばが、戦略であり戦力だという

のか。今おまえは、だれに拠り頼んでいるのか。私に反逆しているが。21 今おまえは、あの傷んだ葦の杖、エジプトに拠り頼んでいるが、それは、それに寄りかかる者の手を刺し貫くだけだ。エジプトの王ファラオは、すべて彼に拠り頼む者にそうするのだ。

ラブ・シャケの言ったことは、事実です。エジプトに秘かに使者を送り、援軍を頼んでいたことがアッシリアの耳に入っていたのでした。これは、ユダが行ってはいけないとイザヤを通してさんざん言われていたことでした。まずその部分を突いて、彼らを心理的に弱体化させようとしているのです。そして、これは悪魔が私たちにまず初めに行うことであることを知らなければいけません。それは私たちの肉の弱さを突いてくることです。徹底的に、その部分を猛攻撃し、ある時は誘惑という手段によって、またある時には、肉に従ったその失敗をここにあるように、徹底的に責め立てることによって攻撃します。

2B 排他的という非難 22

22 おまえたちは私に「われわれは、われわれの神、【主】に拠り頼む」と言う。その主とは、ヒゼキヤがその高き所と祭壇を取り除いて、ユダとエルサレムに「エルサレムにあるこの祭壇の前で拝め」と言った、そういう主ではないか。

肉の弱さを責めた後に、ヒゼキヤの献身に攻撃をしかけました。非常に巧妙です。この献身こそが彼のほめるところなのですが、肉の弱さを指摘した後なので、この献身が悪いものであるかのように摩り替えていることができます。具体的にはヒゼキヤが高き所を取り除いたことを責めています。そしてエルサレムにある祭壇の前で拝め、と言ったことを責めています。その排他性を攻撃しているのです。しかし、キリストの弟子になるとは、狭い門から努めて入るような道を歩むことです。家族や自分のいのちさえ憎むという、強い決断をしなければいけない存在です。その度に、あなたは排他的だという中傷を行います。

3B 物理的な力 23-24

23 さあ今、私の主君、アッシリアの王と賭けをしないか。もし、おまえのほうで乗り手をそろえることができるのなら、おまえに二千頭の馬を与えよう。24 おまえは戦車と騎兵のことでエジプトに拠り頼んでいるが、私の主君の最も小さい家来である総督一人さえ追い返せないのだ。

エジプトに拠り頼むということは、馬に拠り頼むことです。モーセを通して馬に頼ること、そのためにエジプトに行くことは決してしてはならない、あなたがたはエジプトで奴隷であっただから、金輪際、戻って行ってはいけなくと戒められていました。その肉の部分をラブ・シャケは嘲笑っています。私たちに、その目に見えるものに目を向けさせています。これも敵の攻撃です。物理的なことに目を向けさせることです。

4B 主の御名の濫用 25

25 今、私がこの場所を滅ぼすために上って来たのは、【主】を差し置いてのことであろうか。【主】が私に「この国に攻め上って、これを滅ぼせ」と言われたのだ。』」

主の御名を使って、ヒゼキヤを責めています。主は彼の味方であられるのに、主が彼の敵になっていると嘘を付いているのです。悪魔は、主の名を使ってまでして、私たちを神の愛から引き離そうとします。「これだけの過ちを犯したのだから、イエスはお前を見限ったのだ。イエスをお前の主だと言ってみろ、イエスの名が汚れるぞ。」こう言って、すべての罪と咎を負って、自分のために死んでくださったほどに愛されているイエスとは異なる、偽物を悪魔は突きつけてくるのです。

4A 敵の偽り 26-37

1B 主への信頼 26-30

26 ヒルキヤの子エルヤキムとシェブナとヨアフは、ラブ・シャケに言った。「どうか、しもべたちにはアラム語で話してください。われわれはアラム語が分かりますから。城壁の上にいる民が聞いているところでは、われわれにユダのことばで話さないでください。」27 ラブ・シャケは彼らに言った。「私の主君がこれらのことを告げに私を遣わされたのは、おまえの主君や、おまえのためだろうか。むしろ、城壁の上に座っている者たちのためではないか。彼らはおまえたちと一緒に、自分の糞を食らい、自分の尿を飲むようになるのだ。」

当時は、国々が貿易をする時に、アラムで話されていた言葉を使っていました。ヘブル人の話すヘブル語ととても似ていたので、国の高官ラブ・シャケはすぐに習得していたのでしょう。そして、今度は攻撃の対象が、一般のエルサレム住民になるのです。自分が我慢できても、敵は、自分に関わる人たちに攻撃の的を移します。

28 ラブ・シャケは突っ立って、ユダのことばで大声で叫んで、こう告げた。「大王、アッシリアの王のことばを聞け。29 王はこう言っておられる。『ヒゼキヤにごまかされるな。あれは、おまえたちを私の手から救い出すことができないからだ。30 ヒゼキヤは、「【主】が必ずわれわれを救い出してください。この都は決してアッシリアの王の手に渡されることはない」と言って、おまえたちに【主】を信頼させようとするが、そうはさせない。』」

ラブ・シャケは、何とかして民から主への信頼を取り去ろうと躍起になっています。イスラエルの神に対する信頼ではなく、ヒゼキヤという人間を信じるのをやめなさいと言っています。ヒゼキヤに注目させているのです。そうやって、主への信頼から民を引きずり下ろそうとしているのです。悪魔は上手に、そういったところに不信をもたらすのに得意です。主への信頼ではなく、主のことばを語る者たちを信用するな、と持ちかけるのです。

2B 物質の約束 31-32

31 ヒゼキヤの言うことを聞くな。アッシリアの王はこう言っておられるからだ。『私と和を結び、私に降伏せよ。そうすれば、おまえたちはみな、自分のぶどうと自分のいちじくを食べ、自分の井戸の水を飲めるようになる。32 その後私は来て、おまえたちの国と同じような国におまえたちを連れて行く。そこは穀物と新しいぶどう酒の地、パンとぶどう畑の地、オリーブの木と蜜の地である。おまえたちが生き延びて死ぬことのないようにするためである。たとえヒゼキヤが、「【主】はわれわれを救い出してくださる」と言って、おまえたちをそそのかしても、ヒゼキヤに聞き従ってはならない。

これは誘惑ですね。主に拠り頼まなければ、容易に豊かな食物が得られるのに、というのは大きな誘惑です。私たちは、主に拠り頼む以外の方法で、いとも簡単に目的のものを得ることができる社会の中にいます。

3B 異教の神々との同一化 33-37

33 国々の神々は、それぞれ自分の国をアッシリアの王の手から救い出しただろうか。34 ハマテやアルパデの神々は今、どこにいるのか。セファルワイムやヘナやイワの神々はどこにいるのか。彼らはサマリアを私の手から救い出したか。35 国々のすべての神々のうち、だれが自分たちの国を私の手から救い出したか。【主】がエルサレムを私の手から救い出せるとでもいうのか。』

ここで、この言葉が主の怒りを引き起こしました。他の国々で拝まれている神々と、ご自身をアッシリアが同列に置いたからです。「Ⅱ 歴代 32:19 彼らは、人の手のわざである、地上の民の神々について語るのと同じように、エルサレムの神について語ったのである。」私たちも、キリストご自身について、あたかも他の神々と同じ、他の未信者の人と同じ問題を抱えているではないか？という挑戦を受けます。その時に、キリストを他の世にあるものに引き下げているのです。

36 民は黙って、彼に一言も答えなかった。「彼に答えるな」というのが、王の命令だったからである。37 ヒルキヤの子である宮廷長官エルヤキム、書記シェブナ、アサフの子である史官ヨアフは、自分たちの衣を引き裂いてヒゼキヤのもとに行き、ラブ・シャケのことばを告げた。

ヒゼキヤの命令は賢明でした。ラブ・シャケの言っていることは、反論できるに有り余る議論です。神の真の知識を持っている者にとっては、あまりもの無知であります。でも答えるな、と命じました。これが敵に対抗する方法です。エバが惑わされたのは、一言反論したからであります。

5A 主の宮に入る王 19章

こうやって、ラブ・シャケからヒゼキヤは恐怖を心に植えつけられました。ヒゼキヤがしかし、恐れ

に打ち勝つ行動に移りました。それは、自分を弱いままで、主の前のところに行くことです。

1B 主の言葉

1 ヒゼキヤ王はこれを聞くと衣を引き裂き、粗布を身にまとして【主】の宮に入った。2 彼は、宮廷長官エルヤキム、書記シェブナ、年長の祭司たちに粗布を身にまとわせて、アモツの子、預言者イザヤのところに遣わした。3 彼らはイザヤに言った。「ヒゼキヤはこう言っております。『今日は、苦難と懲らしめと屈辱の日です。子どもが生まれようとしているのに、それを産み出す力がないからです。4 おそらく、あなたの神、【主】は、ラブ・シャケのすべてのことばを聞かれたことでしょう。彼の主君、アッシリアの王が、生ける神をそしるために彼を遣わしたのです。あなたの神、【主】は、お聞きになったそのことばをとがめられます。あなたは、まだいる残りの者のために祈りの声をあげてください。』」

ヒゼキヤは主の宮の中に入りました。そして、預言者から神の言葉を聞けることを期待したのです。ここが大事です、自分が今、落ち込んでいるままに主の前に心を注ぎだし、そして、御言葉を聞こうとしているのです。

2B 心を注ぎだす祈り

そしてこの後に、イザヤから神の言葉を受けとります。それは、こういうものでした。

6 イザヤは彼らに言った。「あなたがたの主君にこう言いなさい。『【主】はこう言われる。あなたが聞いたあのことば、アッシリアの王の若い者たちがわたしをののしった、あのことばを恐れるな。7 今、わたしは彼のうちに霊を置く。彼は、あるうわさを聞いて、自分の国に引き揚げる。わたしはその国で彼を剣で倒す。』」

「あのことばを恐れるな」と励まされています。ヒゼキヤは、恐れとの戦いにいました。それは、自分自身が主に拠り頼むこと、また民に主に拠り頼めと言っていたことに対して恐れを植えつけさせようとした。これが敵の仕業ですね。けれども、主の前に来た者には勝利が約束されています。アッシリアの王が自分の国に引き上げるということです。けれども、アッシリアの王は今度は自身で手紙を書き、ラブ・シャケが脅したことをさらに強調して書きました。そして、他の神々とイスラエルの神をいっしょくたにしています。

それでヒゼキヤは祈りました。なんと受け取った手紙を、宮の中で広げて祈ったのです。ここが大事ですね。手紙の内容は自分には負いきれません、ですから、主に直接、読んでいただくのです。このように、主に献身したら、弱さも含めて真っ直ぐに主の前に生き、そこから癒しも受け、解放も与えられるのです。